

富山市

四方荒屋遺跡発掘調査報告書

2000

富山市教育委員会

富山市
四方荒屋遺跡発掘調査報告書

2000

富山市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、富山市四方荒屋字漆縄割地内に所在する四方荒屋遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、分譲宅地造成工事に伴うもので、有限会社フロンティア都市開発の依頼を受けて富山市教育委員会が実施した。なお、出土品整理は市単独事業として実施した。
- 3 調査期間及び面積
　　試掘確認調査　　平成7年12月5日　　対象面積　4,191m²
　　発掘調査
　　第1期　平成8年5月20日～平成8年6月30日　面積　614m²
　　第2期　平成8年11月5日～平成8年11月30日　面積　180m²
　　出土品整理　平成12年2月1日～平成12年3月31日
- 4 調査担当者
　　試掘確認調査　　古川知明（富山市教育委員会）
　　発掘調査　　第1期　　古川知明
　　　　　　　　第2期　　桐谷　優・深見　尚（山武考古学研究所）
　　出土品整理　　古川知明・桐谷　優・折原洋一（山武考古学研究所）
- 5 調査にあたり、富山県埋蔵文化財センターの指導を得た。また、調査報告書作成に当っては、宮田進一氏の指導を得た。記して謝意を表します。
- 6 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 7 本書の執筆は、I～II、III-1～3、IVを古川、III-1・4を桐谷・折原が行い、各々の責は文末に記した。

目　　次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯	4
III	調査の概要	
1	全体概要	5
2	第1地区の遺構と遺物	6
3	第2地区の遺構と遺物	14
4	第3地区の遺構と遺物	17
IV	まとめ	20
報告書抄録		
写真図版		

I 遺跡の位置と環境

四方荒屋遺跡は、富山市街地の北方約7kmの海岸部、富山市四方荒屋地内に所在する。

遺跡は、神通川左岸の海岸砂丘内側の低湿地上に立地し、標高は3mを測る。現在の神通川から西へ1.5km、海岸汀線からは約600mの距離にある。

遺跡の東側はシルト・砂を主体とする河川堆積物が広がる。ここはかつての神通川流路であったところで、「越中記」によれば江戸時代万治元年（1658）の大洪水で東岩瀬に流れができ、その後寛文8～9年（1668～69）の洪水以後本流は東岩瀬側となった。これがほぼ現在の流路である。西岩瀬側の川は古川と呼ばれた。これは次第に縮小し現在は細い流れとなっている。

遺跡の北～西側一帯は「四方西岩瀬」と呼ばれている。神通川河口周辺は古代には新川郡石勢郷に含まれる。「延喜式」や「倭名類聚抄」にみえる磐瀬駅はこの河口周辺のいずれかに置かれたと推定され、西岩瀬がその候補地と考えられている。

日本最古の海商法「廻船式目」寛正2年（1223）でかかげられる三津七湊のうち、七湊の一つに越中岩瀬湊がある。この湊は西岩瀬港をさすもので、この繁栄は享保年間頃まで加賀藩の米積出港として利用されるなどして続き、江戸十三港のうち第8番に「越中州八重津西岩瀬港」とあげられるまでになったが、それ以後は東岩瀬港に機能が移転し、漁港等として利用された。

西岩瀬は、現在海岸が諏訪神社のすぐ北側まで接近しているが、寛文年間（1661～1673）は西岩瀬町域の北端から海岸まで400間があったとされ、また海禪寺所蔵の貞享年間（1684～1688）の「西岩瀬古図」によると、現在の汀線あたりが当時の本通りで、そこからさらに北側へ町屋・道路が延びている様子が描かれている。これらは、港町として栄えた西岩瀬町が、海岸浸食により次第に後退した様子を物語るものである。現在も浸食は進行しつつあるため、防波堤や防波ブロックにより砂の流出が食い止められている。

周囲の遺跡を見ると、縄文時代は本遺跡で縄文後期～晩期の土器、千原崎遺跡で中期から晩期の土器が出土しているが少量であり、遺構を伴わなかつたり二次堆積であつたりして集落の形成は積極的には認められない。

弥生時代中期から古墳時代前期にかけては大規模な集落が形成される。本遺跡と隣接する四方背戸割遺跡では溝〔富山市教委1999〕、江代割遺跡で竪穴住居が検出〔富山市教委1988〕されていて。いずれも弥生後期に洪水による冠水があり集落は埋没しているが、古墳時代前期に再び集落が形成され、それ以後は比較的安定した集落形成がなされたようである。

奈良・平安時代には、対岸の岩瀬・米田・豊田の河岸段丘上に官的施設と推定される遺跡が出現する。米田大覚遺跡では掘立柱建物群・竪穴住居群が検出され、井戸祭祀や則天文字を記した墨書き土器の出土がある〔山武考古学研究所1996、富山市考古資料館1997〕。豊田大塚遺跡では、平安時代の溝に「神服小年賀」と書かれた人形や人面墨書き土器の出土があり、祓など律令祭祀の場と考えられている〔富山市教委1998〕。

中世では、本遺跡に北接する四方北窪遺跡では区画溝や建物跡が検出されており、中世岩瀬湊の港町遺跡と推定されている〔富山市教委1998、1999〕。また、本遺跡においては今回調査区北側で中世期の屋敷跡が検出されている〔富山市教委・富山市埋蔵文化財調査委員会1999〕。本遺跡と四方北窪遺跡の間には中世段階において幅50～60mの河川流路が存在していたと推定され、

港町遺跡に関連した屋敷としての性格が推定される。

遺跡周辺の各遺跡では中世陶磁器が多く採集されているところから、中世期には岩瀬湊周辺に多数の集落が形成されていたことが推測できる。
(古川)



第1図 遺跡位置図 (1:25,000) 国土地理院1983年改測地図より



第2図 遺跡位置図 (1:25,000) 明治43年陸地測量部測量迅速図 東岩瀬・四方より



第3図 四方荒屋遺跡（1）と周辺の遺跡分布（1:10,000）

2 四方北堀遺跡（奈良・中世・近世／集落跡） 3 四方西野割遺跡（平安～中世／散布地） 4 四方背戸割遺跡（弥生・古墳／集落跡） 5 江代割遺跡（弥生・古墳／集落跡） 6 今市遺跡（縦文～中世／集落跡）

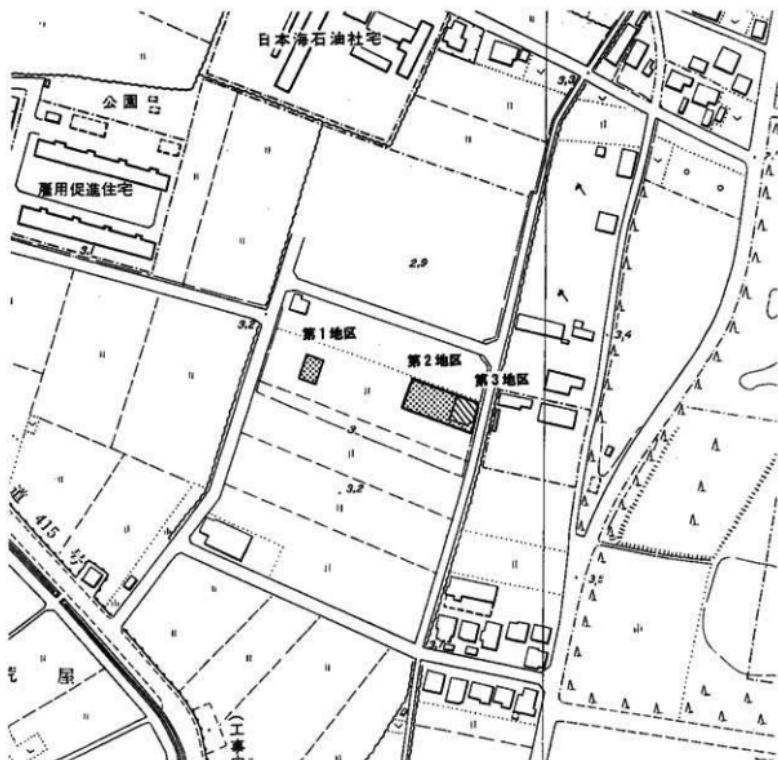
Ⅱ 調査の経緯

四方荒屋遺跡は、昭和63年から平成3年に行われた市内分布調査で新たに発見された遺跡である。遺跡は平成5年3月発行『富山市遺跡地図（改訂版）』に登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られることになった。

平成7年10月、有限会社フロンティア都市開発から四方荒屋字漆縄割地内の分譲宅地造成計画が提示され、埋蔵文化財の所在確認依頼が提出された。計画区域は全域が四方荒屋遺跡の範囲内にあったため、試掘確認調査を実施し、遺跡の所在状況を把握することが必要と判断された。

試掘確認調査は、フロンティア都市開発の協力を得て、平成7年12月15日に実施した。4,191m²の対象地に10か所の試掘トレンチを設定し、延べ392m²の発掘を行なった。

調査の結果、遺跡は大きく2つの地区に分れて所在することが明らかになった。



第4図 発掘調査区域図 (1:2,500)

西側の第1地区は平安時代の集落跡で遺跡範囲は135m²である。遺構は溝跡を検出した。
東側の第2地区も平安時代の集落跡で、遺跡範囲は635m²に及ぶ。遺構には溝群、柱穴と思われるピットがある。遺物は縄文土器、土師器（平安時代）が出土した。

この調査結果に基づき、遺跡の所在が確認された2地区計770m²の保護措置についてフロンティア都市開発と協議を重ねた結果、発掘調査を行なうこととなった。

調査はまず第1地区から着手した。平成8年5月20日に開始し6月5日に完了した。その後第2地区に入り、635m²のうち455m²を対象として調査を進め、6月30日に完了した。

調査が未着手であった180m²（第3地区）は、平成8年中に市教委での調査実施が要望されたが、市は十分な調査体制がとれないため、民間委託を活用して行なうこととし、市教委の監理下で山武考古学研究所（所長 平岡和夫）が調査を担当することで合意を得た。

第3地区的調査は平成8年11月5日に着手し、平成8年11月30日に完了した。これによりすべての発掘調査を完了した。

出土品整理については協議の結果、平成10年度に実施することで合意した。10年5月整理方針について調整したが、平成10年10月フロンティア都市開発が倒産したことが判明し、出土品整理は中断を余儀なくされた。このため市では公費負担により出土品整理を進めることとし、平成11年度に実施した。
(古川)

III 調査の概要

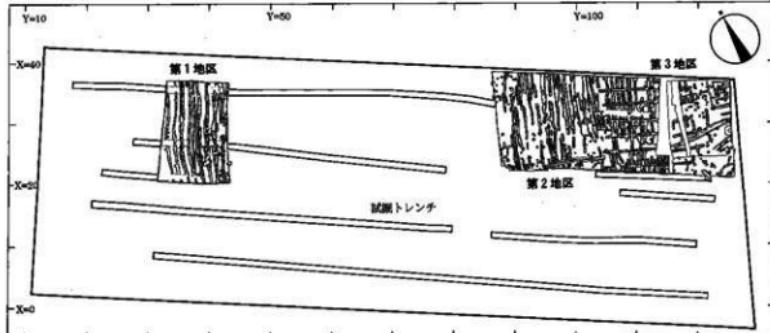
1 全体概要（第5図）

（1）遺構の概要

調査で確認された遺構検出面は1面であるが、弥生時代、古墳時代、平安時代、中世、近世の遺構が重複して検出された。

弥生時代及び古墳時代の遺構には土坑がある。
平安時代の遺構には、掘立柱建物跡、土坑、烟跡がある。
中世及び近世の遺構には、掘立柱建物跡、土坑、烟跡がある。

第1地区では掘立柱建物跡、烟跡、第2地区では掘立柱建物跡、古墳時代前期の土坑、平安時代・中世・近世の烟跡、第3地区では弥生時代の土坑、中世・近世の烟跡を検出した。



第5図 調査区域図 (1:800)

(2) 基本層序（第6図）

第Ⅰ層は水田耕作土である。上から灰色シルト質土（Ⅰ-1層、水田耕土、厚さ20cm）、黄褐色土（Ⅰ-2層、水田耕盤土、厚さ5~20cm）、暗灰褐色土（Ⅰ-3層、旧水田耕土か、厚さ5~10cm）に区分される。第Ⅱ層黒褐色土（厚さ10~30cm、遺物包含層）、第Ⅲ層黄色地山小プロックを含む暗褐色土（漸移層、厚さ5~10cm）、第Ⅳ層黄色シルト質砂土（地山）となる。第Ⅲ層は薄く、部分的な堆積を示す。

畑跡は、第Ⅱ層上面から掘込まれるものと、第Ⅲ層上面から掘込まれるものが認められる。

2 第1地区の遺構と遺物

(1) 遺構

掘立柱建物 柱穴とみられる小ビットを27基検出した。調査区の南西隅（X21~28 Y37~42）に22基、調査区の北東隅（X33~37 Y40~42）に5基がある。

小ビットはいずれも直径10~30cmの円形プランで、深さ10~20cmを測る。掘り方は大きくない。いずれも明確に配列を追うことはできなかったが、複数棟の掘立柱建物の存在が認められ、そのエリアで建物が何度も建替えられたものと推定される。

掘立柱建物の柱穴P01と畑跡を構成する溝は切合っており、掘立柱建物が畑跡より古く形成されたものであることが認められた。

畑跡（第7、8図） 平行する溝群を調査区全体に検出した。溝は幅15~70cm、深さ5~25cmのもので、14条を確認した。溝の覆土は、暗褐色土・黒褐色土・黑色土を主体とし、溝の上部は擾乱を受けているものが多い。

SD10からは、ほぼ完形に近い土師器小型壺（第9図2）が横倒しの状態で溝下位から出土した。

SD05、SD06からは、土師器長胴壺、土錘、青磁など、平安から室町時代の土器が混在して出土しているが、いずれも溝上部からの出土である。

畑を構成する溝群はほぼ南北方向に延び、ほぼ等間隔で平行する凹凸のある溝からなり、3群に区分される。第8図及び表1はそれぞれの溝群の規模等をまとめたものである。

A群は、構成する各溝の幅が最も広く、幅30~70cmに集中する。これらの溝は、その方向の違いから3つに区分される。①はX25以南で、溝の方向はN-5.5°~12.5°-W、②はX25からX35までの間で、溝の方向はN-0.5°~3°-E、③はX35以北で、溝の方向はN-1°~5°-Wである。

B群は、A群より小規模で溝間も狭い一群である。全体がほぼ直線的で、溝の方向はN-0°~3°-Wである。溝CはB群と類似するが、単独であり、他との関連は不明である。

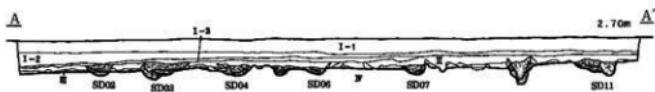
これらの新旧は、重複する溝10、11の切合関係から、A群が古くB群が新しい。

この溝群は、上に述べた特徴から、畑の畝跡と考えることができる。最初に形成されたA群の畑では、②に見るように、畝列の長さは10mが一単位となっており、微妙に方向を変えながら連続した畝を形成しているように受けられる。

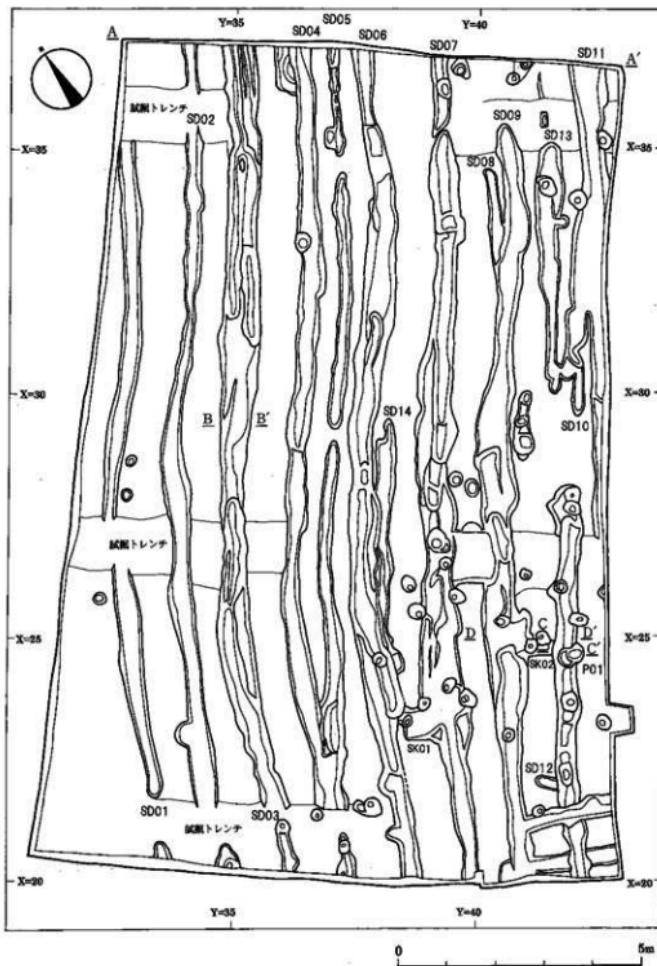
これらの畑跡は重複する溝10、11の切合関係から、A群が古くB群が新しいとみられる。

溝A群を構成するSD10からは土師器小形壺の出土があり、溝群Aの形成された年代は平安時代前期（9世紀中葉）とみられる。

この溝A群と掘立柱建物の柱穴P01とは切合っており、掘立柱建物柱穴が古い。



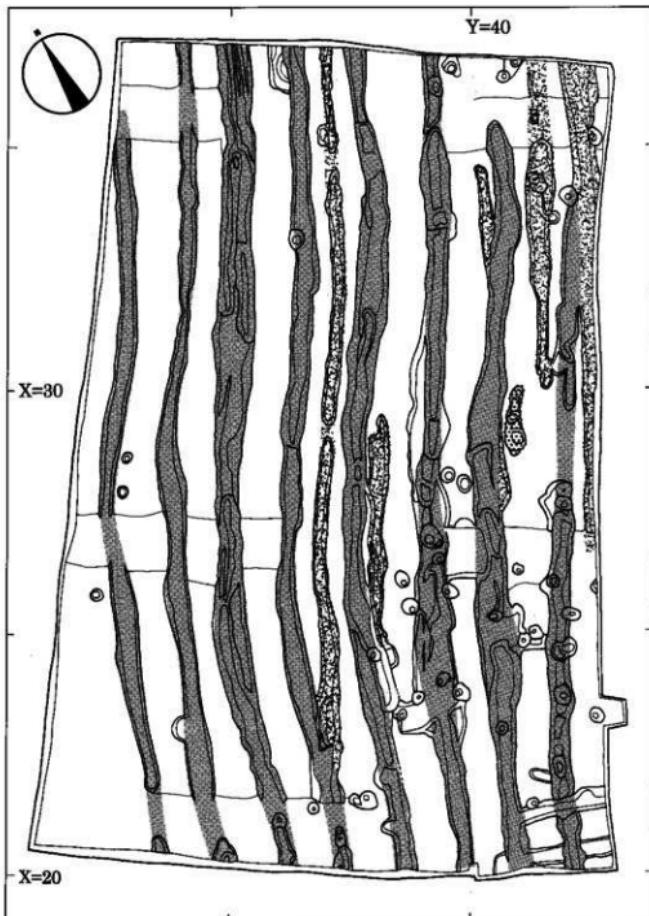
第6図 第1地区北壁の土層 (1:80) アミ目は造構覆土



第7図 第1地区造構平面図 (1:100)

区分	構成する溝番号	溝の規模	溝間隔
溝群A	SD01~04,06,07,09,10 の 8 本	幅 15~70cm、多くは 30~70 cm。 深さ最大 20cm	1.2~1.5m
溝群B	SD05,08,11,13,14	幅 15~40cm 深さ最大 10cm	1.0~1.3m
溝C	番号なし	幅 20~30cm 深さ最大 10 cm	単独

表1 番跡を構成する溝群の区分一覧（第1地区）



第8図 第1地区番跡分類図（1:200）

(2) 遺物 (第9図)

土師器 (1~7) 壺がある。1は口径23.6cmの長胴壺である。口縁端部は内側に丸める。SD05出土。

2は小型壺で、口径13.5cm、高さ13.6cmを測る。口縁端部は僅かに内傾し、内側へ丸める。胴部下半と底外面はヘラ削りによる整形がなされる。口唇内面には煤が付着し、また底外面の一部には二次的な被熱による剥落がみられる。SD10出土。9世紀中葉。

3~7は長胴壺の体部片である。体部外の上半は横方向のカキメ→平行タタキ→ケズリ、下半は平行タタキ、内面上半は斜め方向のカキメ→横方向のカキメ、下半は横方向のカキメ→扇状タタキが施される。SD06出土。

須恵器 (8) 壺の底部で高台がつく。高台内端はシャープな稜を形成する。高台端部を広げ安定度を高めている。底径7.2cm。第II層出土。

土錘 (8) 土師質で、焼成が悪く脆弱である。推定最大径4.8cm、孔径1.8cmである。SD06出土。

青磁 (9, 10) 龍泉窯系の蓮弁文碗である。外面の鎬蓮弁文は片切り彫りにより作出される。釉は薄い緑色で、胎土は淡灰色を呈する。10の口縁端部は短く外反する。SD06出土。11は小ぶりの碗である。第II層出土。

白磁 (11) 瓶の口縁部とみられる。釉掛けは薄い。口径6cm。第II層出土

珠洲焼 (12, 13) 片口鉢である。12は底部で、全体に黒色の煤が付着し、体部側の断面にも付着が見られる。内面は摩滅が著しいが、卸し目は施されない。焼成は悪く胎土は脆弱である。底径17.0cm。SD08出土。

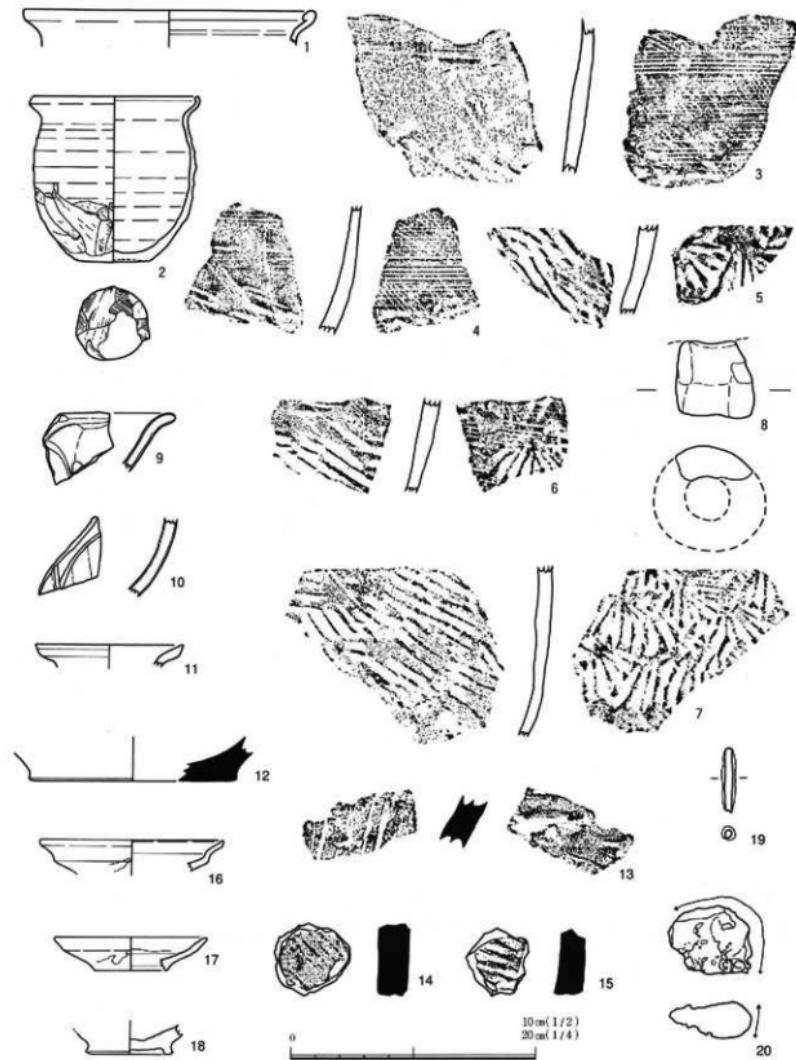
13は体部下半で、内面に粗い卸し目を付ける。植物茎とみられる圧痕が2か所見られる。胎土には海綿骨針を多く含む。第II層出土。

陶製円板 (14, 15) 珠洲焼壺体部片を利用したもの2点がある。14は円形になるよう整形後、両面から小剥離を加え、全体を楕円形に整形している。重さ12.51g。第II層出土。15は大まかな整形を行った後わずかに整形加工を行うのみである。重さ8.78g。第II層出土。

越中瀬戸 (16, 17) 16は灰釉腰折皿である。胴部の屈曲は大きい。口縁端部は上につまみ上げており、端部外面は垂直に立ち上がる。口径15cm。17は灰釉皿で、釉は灰白色を呈する。高台は削出による。口径12.4cm。

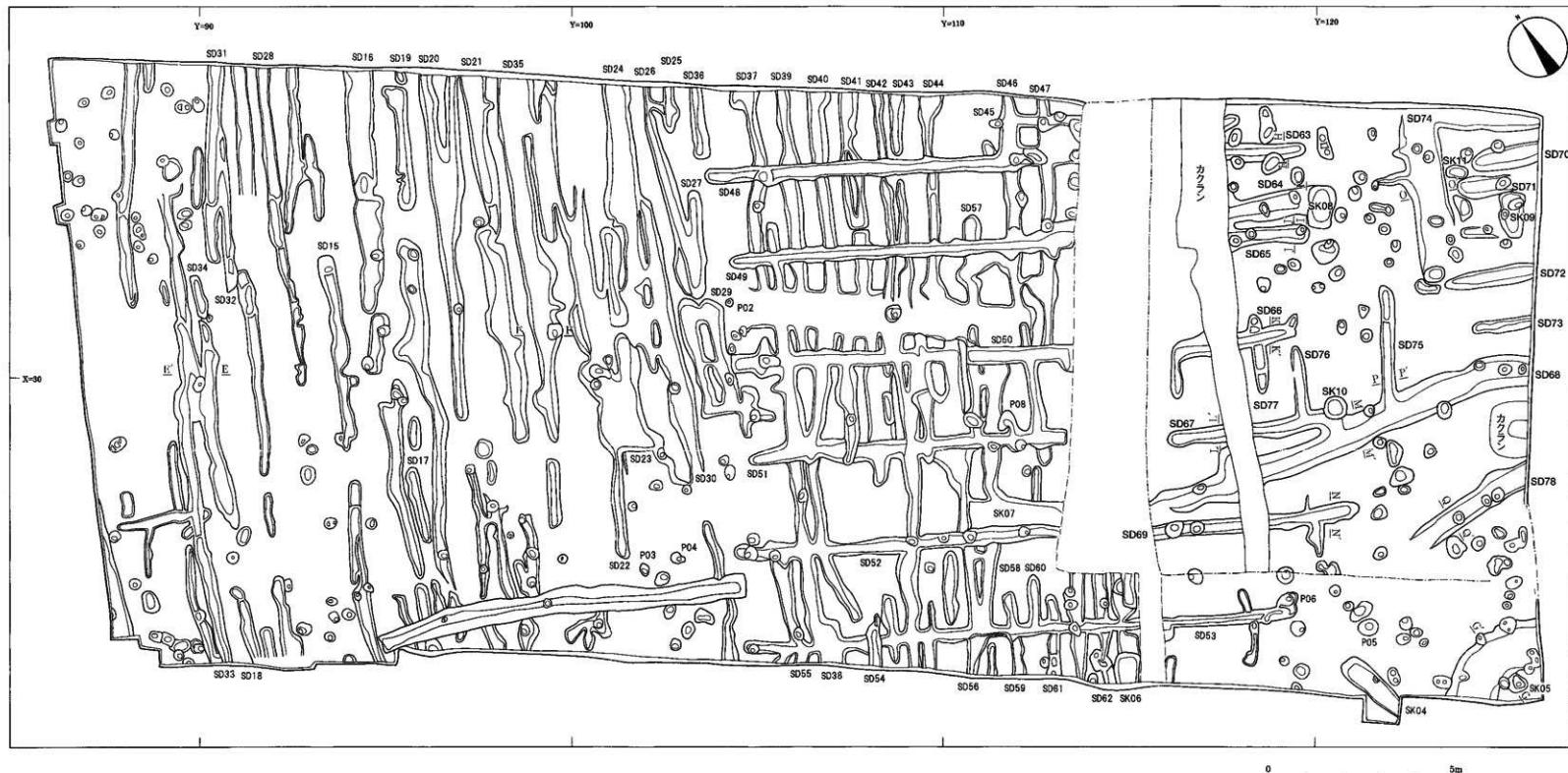
鉄釘 (19) 断面円形の釘とみられ、頭部と先端を欠き、長さ2.6cmが残る。径2.5mmを測る。重さ0.98g。

鍛冶関連遺物 (20) 小型碗形滓である。滓の側面には砂粒を多く含む鉄分が付着するが、全周しておらず、滓は割れた断片である。表面は黒色を呈し、光沢がある。細かな気泡痕が多く認められる。裏面は凹凸が多く、鏽により褐色化している。重さ19.42g。SD06出土。

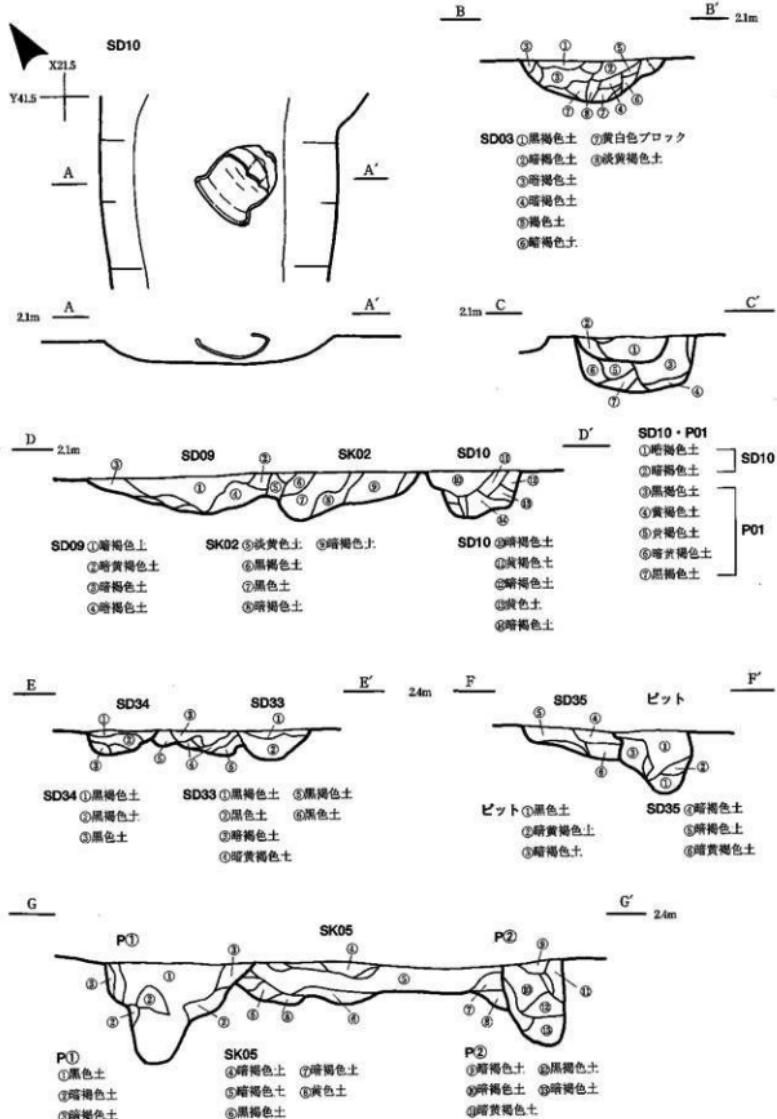


第9図 第1地区出土遺物

1·2 土師器(1/4)、3~7 土師器(1/2)、8 土鍤(1/2)、9·10 青磁(1/2)、11 白磁(1/2)、12·13 珠洲焼(1/4)、
14·15 陶製円板(1/2)、16·17 越中瀬戸(1/4)、18 須恵器(1/4)、19 鉄釘(1/2)、20 炉壁(1/2)



第10図 第2地区・第3地区遺構平面図 (1:100)



第11図 第1地区・第2地区遺構実測図 平面図1:10 土層断面図1:20

3 第2地区の遺構と遺物

(1) 遺構（第10～13図）

本地区では掘立柱建物跡、古墳時代前期の土坑、平安時代～近世とみられる烟跡を検出した。

掘立柱建物跡 柱穴とみられるピットが多数検出された。集中するエリアは、調査区北東隅、調査区南西部、調査区東南部の3つのブロックである。ピットは径10～20cmと小さく、柱痕を明瞭に残すものはない。一時的な作業場等簡易な建物であったと推定される。

土坑

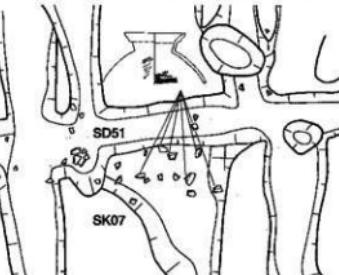
SK04 調査区南東端に所在する深さ10cmの長溝状のもの延長2mを確認した。主軸はN-12°-Wである。

SK05 調査区南東端に所在する。円弧を描く浅い溝状の遺構で、幅約1.5m、深さ10cmを測る。覆土中から古代須恵器片が出土しており、平安期の遺構と考えられる。

SK07 調査区東部においてSD51と重複して検出した。浅い凹地状の遺構で、覆土中から弥生後期の壺形土器が出土した。同一個体はSD51内にも認められ、SD51開削の際SK07を壊したための混入とみられる。弥生後期の遺構とみられる。

烟跡 平行する溝群を調査区全体に検出した。溝は、第1地区同様、幅15～90cm、深さ5～25cmの規模である。溝の覆土は第1地区と同様暗褐色土・黒褐色土・黒色土を主体とする。各溝から弥生～近世の遺物が混在して出土した。SD44からは鉄釘が集中して出土したことが注目される。

煙を構成する溝群は、第1地区と同じ南北方向の主軸を持つものが主体である。第1地区では調査区全体にわたる重複であったが、本地区では複雑に入り組んでおり、詳細な分析が不可能である。しかし溝間隔と方向規模等を基準としてグルーピングした結果、確認できた群についてのみ記すと、南北方向のものは10群あるほか、調査区東部において新たに東西方向の溝群を確認した。したがって第2地区における溝群は計11群となる。第13図・表2には溝群の規模等をまとめた。溝間隔は、0.8mから2.5mまで6種があり、1.2m間隔、1.3m間隔のものが主体である。それらは調査区西半部に所在し、東半部では間隔が狭いものが集中する傾向にある。溝群Dの第12図



みが他の溝群と直交する方向で、大きく異なる。

溝方向は、溝群Dを除き、N-25°-EからN-36°-Eのほぼ10° 内外で類似した傾向を示す。この方向は、遺跡の東側を流れる河川（神通古川）の流路方向との関連が想定される。

これらの溝群は、中世から近世にかけて営まれた畠跡を示すものであり、断続的に耕作が行われた結果、複数ブロックの耕作痕が重複して検出されたものと考えておきたい。

（2）遺物（第14図）

弥生土器（21~26）

21は壺口縁で有段状となる。端部を面取りし、少し窪ませて棒状工具によって沈線状にナデ付ける。端面に赤彩らしきものがみられる。口縁外面はヨコナデ、内面はハケ目となる。SD41出土。口縁端部を面取りして連続刺突を行う弥生中期後半の手法に類似し、その段階に位置付けておく。

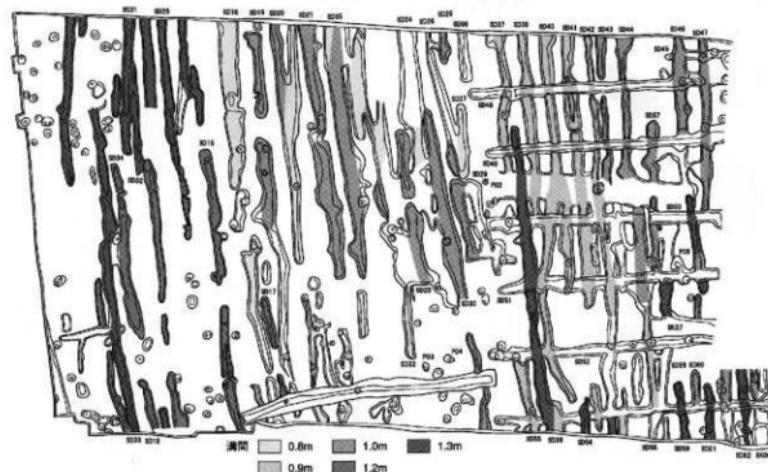
22は壺形土器体部上半で、肩部の張りが強い。外面は横方向のハケメ、部分的に後ヨコナデまたはヘラミガキを施す。内面は上からヨコナデ帯、ハケメ帯、ヨコナデ帯の順に施す。工具として使用されたハケは幅1.7cmに10本引く規格である。漆町編年（田嶋 1986）第6群（白江・新段階）に類例がある。

23は高杯杯部。内外面とも丁寧なヘラミガキがなされる。脚との接合は円板充填による。

24は壺体部。内外面とも細かなハケメを施す。第II層出土。

25は壺体部上半。外面はヘラミガキ、内面は横方向のケズリを施す。外面にはヘラ状工具先端で引いた直線状の線刻がある。SD50出土。

26はミニチュア土器。4段の粘土紐輪積み後の手捏ねにより整形する。口径5.0cm、底径4.4cm、コップ状を呈する。内面は、口縁上半はヨコナデ、下半は斜め上方向のナデ上げ、外面は指頭によるオサエで、輪積痕を残す。底部は平坦で、初痕が明瞭に残るほか、初に由来するとみられる傷が多く付く。初痕の大きさは6.2mm×4.0mmを測る。SD49出土。弥生後期後半。



第13図 溝群分類図



第14図 第2地区出土遺物

21~23 弦生土器 (1/4)、24・25 生土器 (1/2)、26 古式土器 (1/4)、27 ミニチュア土器 (1/2)、28 古式土器 (1/2)、29 須恵器 (1/4)、30 土器 (1/4)、31 須恵器 (1/2)、32 土器 (1/2)、33 疙瘩燒 (1/2)、34 伊万里 (1/4)、35 越中漬口 (1/2)、36 錫器製皿板 (1/2)、37 炉壁 (1/2)、38 破石 (1/2)、39~45 鉄釘 (1/2)

古墳時代の土師器（27, 28）

27は壺上半部。有段口縁をもつ。口縁端部はやや外反し、口縁内側にも緩い段をもつ。外面はヘラミガキで、口縁部は丁寧に横方向に施すが、体部は粗めで、右上から左下方向に円棒状工具で磨いており、凹凸がある。内面は頸部は横方向のヘラミガキ、体部は上半がヨコナデ、下半は横方向のハケメとなる。漆町編年の第8群、古府クルビ期・新段階のものとみておく。SK07出土。

28はくの字状口縁壺の口縁部。外面ヨコナデ、内面横方向のヘラミガキである。古墳前期前半。須恵器（29, 30） 29は杯身で、焼きが弱く脆弱である。体部は直線的に立ち上がり、器厚は薄い。底部はヘラ切で、9世紀以降の製品。SK05出土。

30は、壺体部で口頸部直下の部分である。外面は平行叩き、内面は同心円文となる。第II層。

土鍤（31） 完形品で、長さ5.1cm、最大径3.1cm、中心孔径1.0cm。第II層出土。

珠洲焼（32, 33） 片口鉢がある。32は御目はない。口縁端部は面取りし方頭状となる。試掘時出土。33は体部下半で、御目間は広く粗い。吉岡康暢氏による珠洲編年（吉岡1994）のIII—IV期頃（鎌倉一室町前期）とみられる。

伊万里（34） 口径9.9cmの小型碗である。外面に草花文とみられる染付文様がある。江戸期。

越中瀬戸（35） 撥鉢体部で、内面に粗い御目がある。内外面とも鉄軸がかかる。江戸期。

磁器製円盤（36） 伊万里碗片を利用したもの。周囲は細かく調整している。碗外面には草花文とみられる染付文様がある。重量3.35g。江戸期。第II層出土。

粘土塊（37） 表面にガラス質が付着した極めて軽い焼成粘土塊の破片である。原料粘土には海綿骨針様の白色物質を含む。壁体は表面付近が灰色化、それ以外は赤～赤橙色し、胎土は脆弱である。鑄造に関連するものと思われるが、不明。SD23出土。

砥石（38） 凝灰岩製の中砥で、周囲が欠損する。長軸方向の線状痕が認められ、使用痕とみられる。SD22出土。

鉄釘（39~45） 40, 45のみが完形品である。40は長さ4.2cm、重量4.75g。45は長さ3.4cm、重量1.22g、SD44出土。41, 42は断面形から角釘、43は丸釘、それ以外は鋸のため判断できない。

4 第3地区の遺構と遺物

（1）遺構

本地区では掘立柱建物跡、弥生時代の土坑（SK11）、烟跡と考えられる溝群を検出した。

掘立柱建物跡（第15図） 掘立柱建物を構成すると思われる小ピット群を、調査区の北東部と南東隅において検出した。小ピットはいずれも径20~35cmの略円形プランで、深さは10~25cmである。いずれも明確に配列を追うことができず平面形態については不明であるが、その配列からはほぼ同位置での建替えが行われ、その結果、幾棟かの掘立柱建物が存在したものと思われる。

土坑

SK08（第15図、図版6） 調査区北側中央部に所在し、SD64に切り込まれている。平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は長軸220cm、短軸68cm、深さ23cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

SK09（第15図、図版6） 調査区北東隅に所在し、小ピット2基に切り込まれている。平面形は略長方形を呈し、規模は長軸120cm、短軸63cm、深さ16cmである。底面は僅かに起伏し、覆土は

暗褐色土の単層である。

SK10（第15図、図版6） 調査区中央部に所在している。SD05と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は円形を呈し、規模は径60cm、深さ18cmである。底面は概ね平坦で、覆土は暗褐色土の単層である。

SK11（第15図、図版6） 調査区北東隅に所在している。平面形は中央部がやや括れる楕円形を呈し、規模は長軸58cm、短軸37cm、深さ13cmである。

遺物は、底面からやや浮いた位置に弥生後期の壺（46）が出土した。この遺物は、後述するSD71から出土した遺物と接合し、同一個体であることが判明している。

烟跡

東西方向に平行する溝群（SD63～73）と、南北方向に平行する溝群（SD74～77）を検出した。東西方向の溝群は、幅30～50cm、主軸方向N-60°-W前後であり、隣接する第2地区で検出されたSD48～53（溝群D）と規模・方向を概ね揃え、かつ覆土も近似していることから、溝群Dとの関連性がうかがえる。

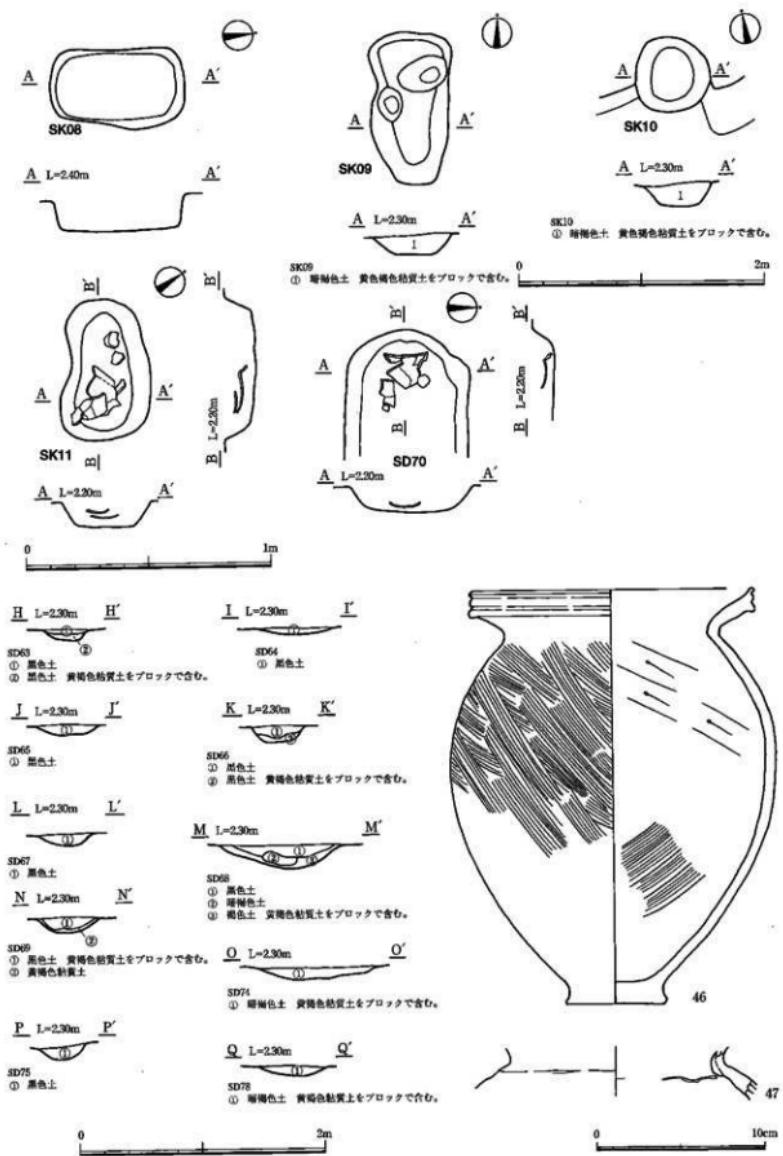
南北方向の溝群の規模・方向は、SD74が幅80cm、主軸方向N-30°-E、SD75～77が幅30～40cm、主軸方向N-25°-E前後である。この方向の溝群は、条数も少なく不明な点が多いものの、第2地区で検出された南北方向の溝群と規模・方向が近似していることから、烟跡の一部として取り扱った。

遺物は、SD71から弥生時代後期の壺（46）、SD63から古墳時代前期と思われる壺（47）が出土している。

（2）遺物

弥生土器（46） 強く外傾する口縁に擬凹線を引き、体部中位に最大径をもつ壺である。外面は体部上半に斜め方向のハケメ、内面は体部上半にヘラケズリ、下半にハケメを施す。計測値は口径17.1cm、底径6.0cm、器高25.3cmである。

古式土師器（47） 壺で、体部と口縁端部を欠いている。口縁は「く」の字状に外反し、外面にヨコナデ、内面にナデを施す。



第15図 第3地区遺構・出土遺物実測図

IV まとめ

1 遺構について

今回調査で検出された遺構は、掘立柱建物・土坑・溝群がある。

遺構解説で触れたとおり、第1地区では掘立柱建物や土坑は、畠跡とみられる溝群より古い構築であり、その時期は平安前期（9世紀後半）以前とみられる。したがって、土地利用の形態は、平安前期（9世紀中葉）頃、居住域から耕作地へと変化したことがわかる。

同様な事例は、本遺跡の北に隣接する四方北窪遺跡でも認められている（富山市教委1999）。四方北窪遺跡では、奈良（8世紀前半）から中世（13世紀以降）まで3期4小期の変遷があり、奈良～中世のいずれかの段階で居住域から耕作地へ変化している。

調査区全体にわたって検出された平行する溝群は、畠跡とみられる。溝部分が歓か否かの問題はあるが、第1地区では南北方向に3群、第2、3地区では南北方向に10群、東西方向に1群の計11群を確認した。このことは、第2、3地区では最低11回にわたる耕作地の変遷があったことを意味し、この場所が耕作地として安定的に利用されたことがわかる。

第1地区では3群ともに調査区外に延びる、極めて長い溝が並行・重複するが、第2地区では断続的になり、第1地区よりも小さなブロックで存在する。これは地山上部が削られ遺構が浅くなつて残らなかつたためとも考えられるが、第1地区に比べ重複が顕著であり、経営方法が異なつていたことが予想される。

2 遺物について

今回調査では、遺構ははっきりしなかつたものの、弥生中期後半とみられる土器が出土し、四方海岸部の利用が弥生中期まで遡ることが明らかになったことは重要である。

本遺跡の南約400mにある江代割遺跡、四方背戸割遺跡では弥生時代後期から集落の形成が始まるとみられている。遺跡はいずれも旧神通川流路（神通古川・古古川）の河川岸辺の微高地上に立地し水害を受けやすい環境にあり、安定的な居住が困難な地域である。弥生後期の冠水跡は江代割遺跡で確認されており、その後古墳時代初期までに周辺地に安定的な集落が形成していくものとみられる。

遺物は量としては少ないが、弥生後期の土器が主体である。ミニチュア土器底部には粗痕が残されており、弥生後期に稻作が行われていたことは確実である。この稻作が周囲の低湿地を利用したのか、あるいは烟を利用した陸稲的な耕作であったかは不明である。

古墳時代初期に属する遺物は少なく、土坑から出土した壺形土器は、一般集落よりも墓地や祭祀遺構から出土する形態のものとみられる。出土した土坑は浅く墓壙的性格とはみなし難いが、冠水や耕作などのため遺構上部が遺存しなかつたという状況も考慮しておく必要があろう。

3 遺跡について

今回調査区での主体的な遺構は畠跡であり、このエリアが平安前期以降耕作地として利用されたことがわかる。調査区の位置は、遺跡全体からみてちょうど中央部にあたる。遺跡の北部では過去にいくつかの発掘調査が行われており、未報告の成果も含め、その概要が次第に明らかになってきている。ここでは、複数の溝で複雑に区画された中世屋敷跡が検出されており、掘立柱建物（6間または5間半×4間総柱建物1棟、倉庫2棟）、井戸、土坑が存在する。屋敷地中央区

画内の主掘立柱建物は規模が大きく、また地口も7間半と広いことから、集落の中でも中心的な屋敷であると推定される。この屋敷地の北側は旧神通古川の流路の一つであり、屋敷地中央区画内の主要掘立柱建物は正面を南に向いているとみられることから、この屋敷は河川を背後にして、南を正面にしていたものであったことがわかる。

今回調査で確認した耕作地は、この屋敷の南側、すなわち入口前面部に位置することになるため、この屋敷の所有者が経営した耕作地（畠）である可能性が高いといえよう。

この中世段階の屋敷地の裏手は、先述のとおり神通古川の支流が流れているとみられる。対岸の四方北窪遺跡では中世後期の溝などが検出され、その西方の四方町地内には中世段階の港町の存在が想定されている。四方荒屋遺跡の屋敷地は、立地条件からみて川をはさんで隔離している観があるが、機能的には小さな短冊形地割で構成される港町内にくらべ広大な敷地を確保できるメリットがある。有力者の館を町屋群と別区画に配置する例は、中世十三湊遺跡でも顕著に認められており、本遺跡では隔離する地理的条件として神通古川にその役割を与えたものと考えられる。

参考文献

- 山武考古学研究所 1996 「38 米田大覚遺跡」『山武考古学研究所年報』No14
- 高瀬重雄監修 1991 「富山県の地名」日本歴史地名大系16 平凡社
- 田嶋明人 1986 「考察 漆町遺跡出土土器の編年の考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 富山市教育委員会 1988 「昭和62年度富山市埋蔵文化財発掘調査概要」
- 富山市教育委員会 1998 「富山市内遺跡発掘調査概要Ⅱ 四方北窪遺跡」
- 富山市教育委員会 1999 「富山市内遺跡発掘調査概要Ⅲ 四方北窪遺跡」
- 富山市教育委員会 1999 「富山市四方荒屋遺跡発掘調査概要」
- 富山市 1987 「富山市史 通史下」
- 富山市考古資料館 1997 「発掘速報96 富山市の古代文字～富山市内遺跡出土墨書き土器～」富山市考古資料館報第32号
- 富山大百科事典編集事務局編 1994 「富山大百科事典」 北日本新聞社
- 布目久三 1982 「四方郷土史話」
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館

報告書抄録

ふりがな	とやましょかたあらやいせきはくつちょうさほうこくしょ						
書名	富山市四方荒屋遺跡発掘調査報告書						
編著者名	古川知明・柳谷 優・折原洋一						
調査機関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター						
所在地	〒930-0803 富山市下新本町5番12号 Tel(076)442-4246 Fax(076)442-5810						
発行年月日	西暦2000年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡 番号	北緯 度 分 秒	東経 度 分 秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
よかたあらや 四方荒屋遺跡	とやましょかたあらやあざう るしなわわり 富山市四方荒屋塗瓦焼削剝	16201 014	36°	137°	19960520～19960630	614	分譲宅地造成工事
			45'	12'	19961105～19961130	180	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
集落跡	弥生・古墳	土坑	弥生土器、古式土師器				平安期における集落から耕作地の変遷を確認した。
	平安	烟跡・土坑・柱穴	須恵器、土師器、鐵滓、鐵釘、磁石				
	中世～近世	烟跡	土師質土器、赤陶器、青磁、青白磁、美濃窯戸、伊万里、唐津、越中窯戸				



発掘調査位置（白丸）

米軍撮影（1946年）を利用 白いハネはフィルム傷

図版
2



調査地遠景（南西から）



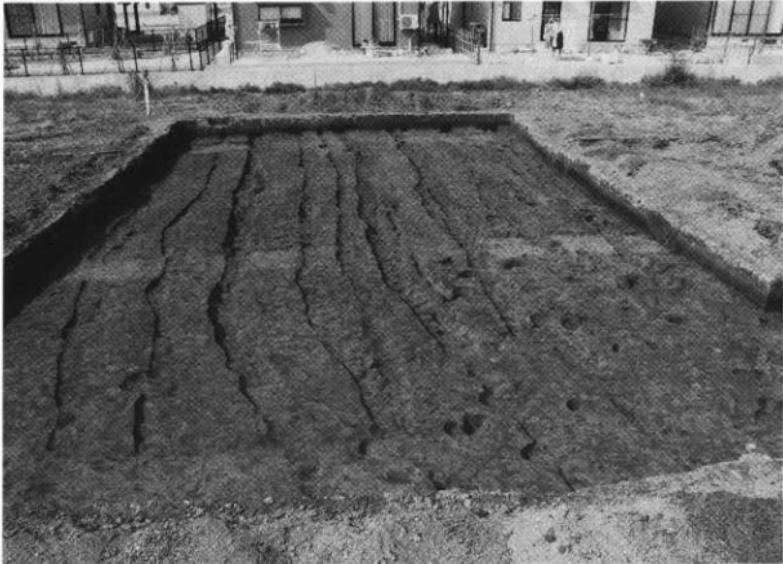
遺構検出状況



第1地区基本土層



SD10土師器甕出土状況



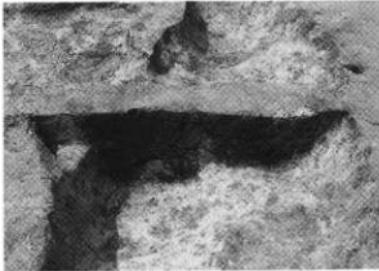
第1地区全景（南から）



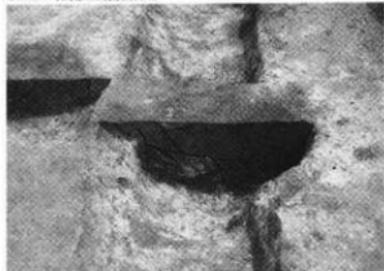
第1地区烟跡全景（南から）



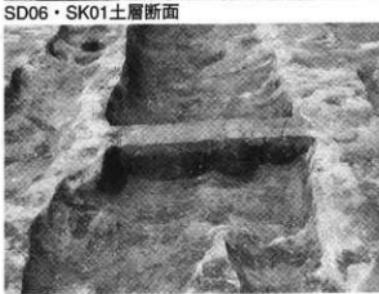
SD07北部土層断面



SD06・SK01土層断面



SD10・P01土層断面



第2地区SD31・32土層断面

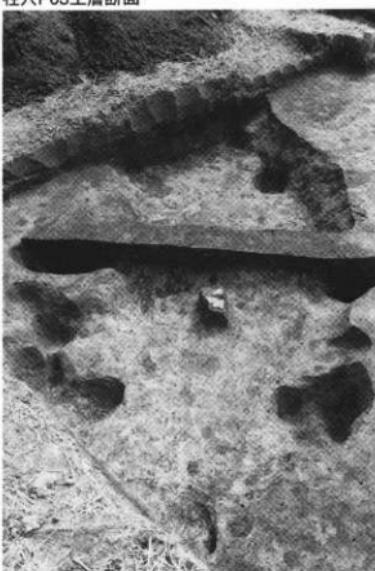
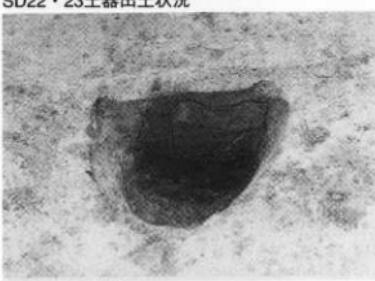
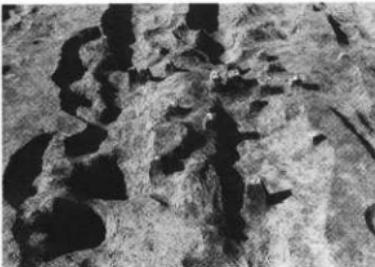
図版
4



第2地区全景（上が北）

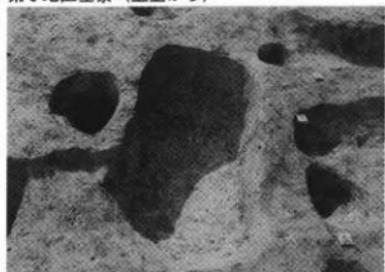


第2地区東半溝群（北から）

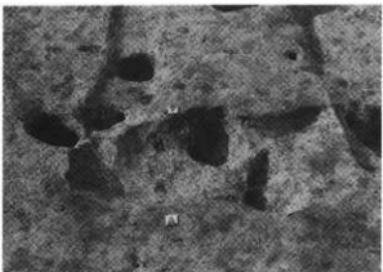




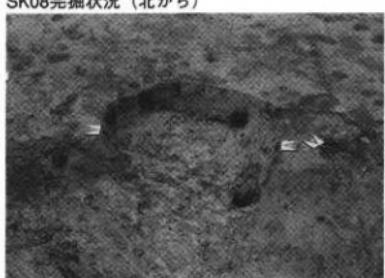
第3地区全景（上空から）



SK08完掘状況（北から）



SK09完掘状況（東から）



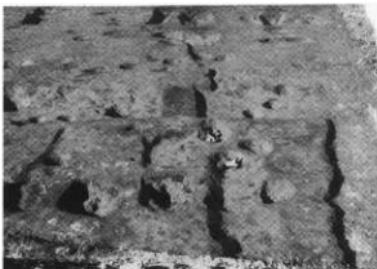
SK10完掘状況（南から）



SK11遺物出土状況（北から）



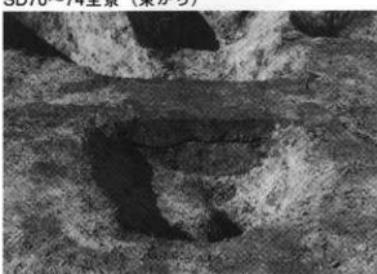
SK10, SD70遺物出土状況（北から）



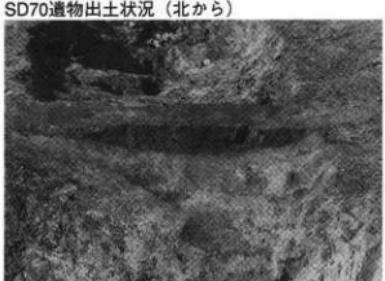
SD70～74全景（東から）



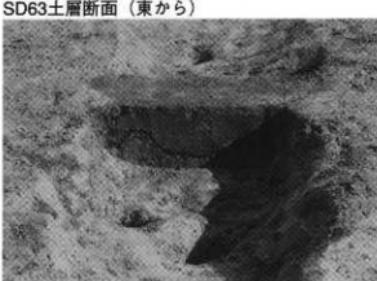
SD70遺物出土状況（北から）



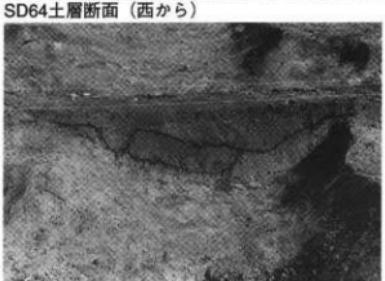
SD63土層断面（東から）



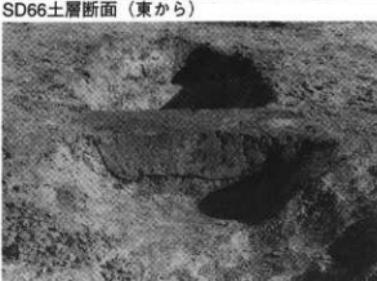
SD64土層断面（西から）



SD66土層断面（東から）



SD68土層断面（東から）

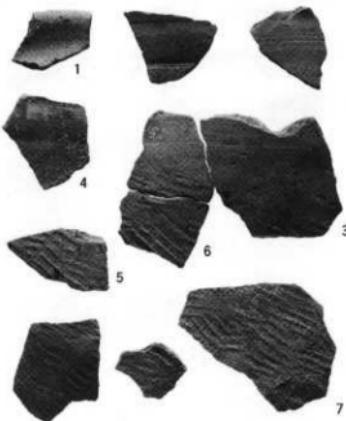


SD69土層断面（西から）

図版 8



2



1

4

5

2

3

6

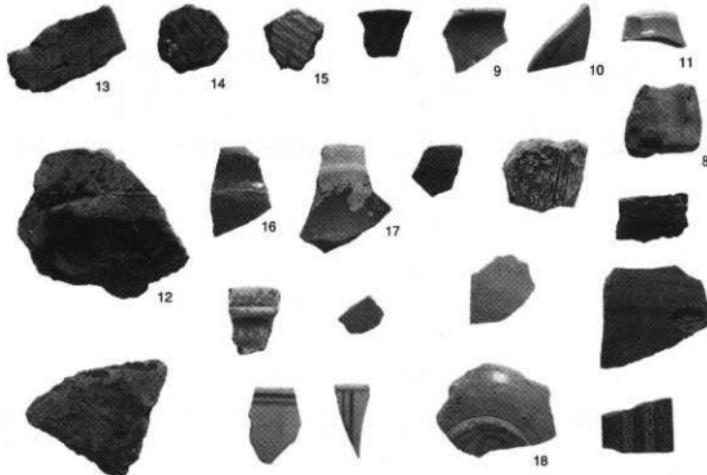
7



19



20



13

14

15

9

10

11

8

16

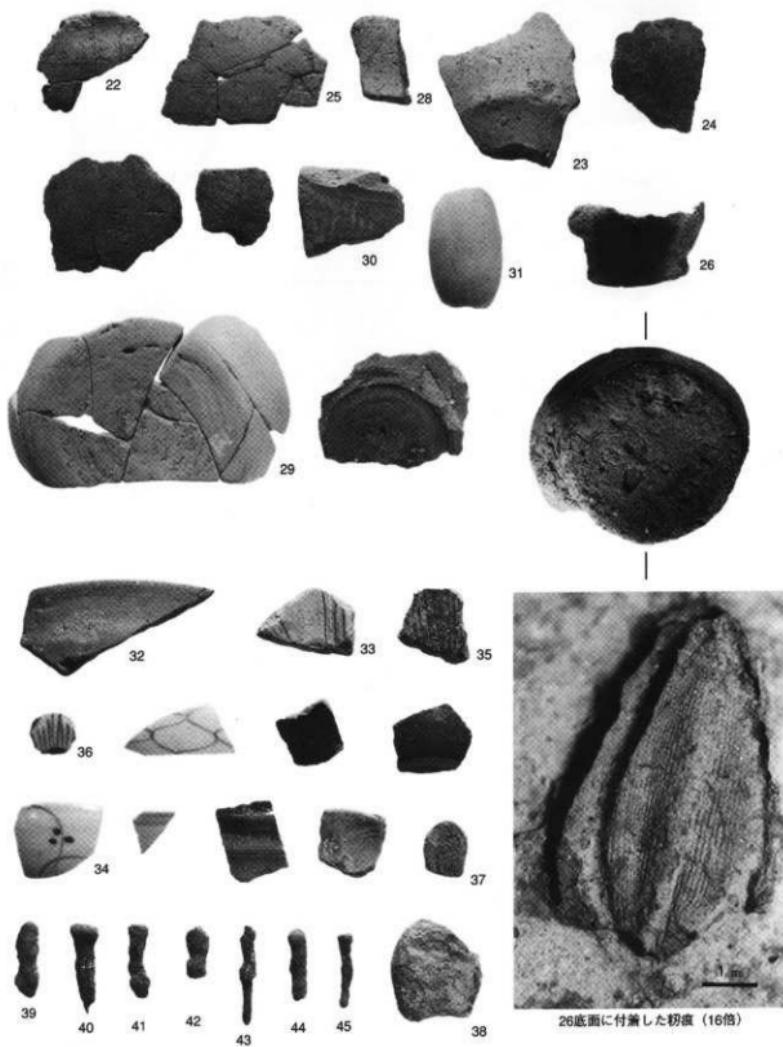
17

12

1

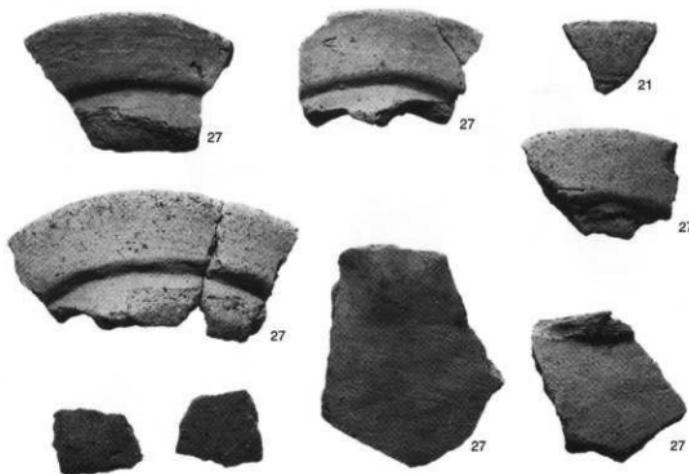
18

第1地区出土遺物

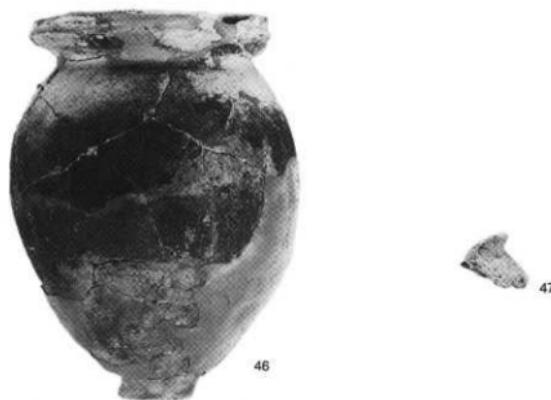


第2地区出土遺物（1）

圖版
10



第2地区出土遺物（2）



第3地区出土遺物

富山市四方荒屋遺跡発掘調査報告書

2000(平成12)年3月30日

発 行 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
富山市下新本町5番12号
TEL (076)442-4246 FAX (076)442-5810

編 集 山武考古学研究所
千葉県成田市並木町221
TEL (0476)24-0536 FAX (0476)24-3657